評

バンジャマン・アラール　チェンバロ・リサイタル

微細な差異に賭けた演奏

古楽器の鍵盤奏者でいま最も注目を集める一人、フランスのバンジャマン・アラール。そのチェンバロ・リサイタルでバッハ作品を聴いた。いや、耳をそばだてたと言うべきだろう。

チェンバロにはさまざまな制約がある。音は微弱で、強弱や音色も打鍵によらず、もっぱらレジスターなる機構で変える。今回のように二段鍵盤を用いても基本的にそう。だから奏者は誰しも工夫を凝らすわけだが、アラールの場合、これが途方もなく繊細なのだ。

前半。遅くともフランス組曲第4番に続くトッカータ長調の第2楽章で、格別だと思った。絡み合う上声部と中声部の音色が、微妙に異なっている。続くヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲RV265を編曲した協奏曲ハ長調になると、アクションまでが大胆に。第2楽章。総休止を目いっぱい取ったあと付点リズムを威厳たっぷりに弾くかと思えば、次の瞬間、星のきらめきのような響きを作る。終楽章の最後は、じゃらじゃらと。物理的にはごく小さな変化なのだが、まるでオーケストラのよう。顕微鏡で覗いたオーケストラだ。

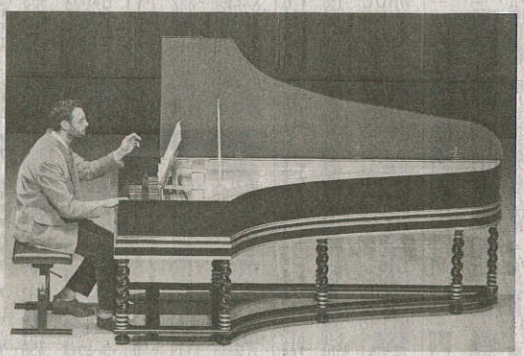
かくして「制約」が、多様性の条件と思えてくる。「強弱」も、チェンバロにあってはむしろ、音色が生む効果なのではないか？

現代の常識が覆される。これこそが古楽の意義にして喜びであって、この基本を当夜ほど痛感したことはない。後半はフランス風序曲とイタリア協奏曲が並び、なるほど、内省的な前者に対し後者は華やかなコントラストが身上かと得心がいったが、評者としては、この痛感が最大の収穫だった。

装飾法の奔放な、あるいはジャズのようなチェンバロ演奏も多い昨今、アラールは学者のように映るだろうか。しかし、微細な差異に賭けた彼の演奏は、騒音まみれの私たちにとって天恵でなくて何であろう？

（音楽評論家・舩木篤也）

――11日、東京・築地、浜離宮朝日ホール。



写真・堀田力丸